

アビリティーズ運動 50 周年

「保障」よりも「チャンス」を」との綱領を軸に進められてきたアビリティーズ運動 50 周年の総会が 6 月 11 日に開催されました。会場は国会議事堂前の憲政記念館。特定非営利活動法人・日本アビリティーズ協会の総会議事のあと、伊東会長の熱のこもる講演が行われ私も心から感動しました。

氏の挨拶文から要旨を抜粋してみますと：



——氏は、1 歳でポリオにより下肢マヒとなった。小学校から体育の授業はいつも見学、運動会にも参加できず、遠足にもほとんど行けない子ども時代を送った。就職に際しては、障害があるというだけの理由で応募書類が送り返されてきた。身をもって差別と偏見を体験した氏は、障害のある人たちに対する社会のさまざまな不合理を、一日でも早くなくしたい、との気

持ちが次第に強くなる。

大学（早稲田）を卒業のとき、心身に障害があっても働けることを証明するため「障害者による障害者のための会社」を設立する準備を進めた。そして、50 年前の 6 月 11 日、現在のアビリティーズ・ケアネット（株）の前身、日本アビリティーズ印刷株式会社を設立した。資本金 150 万円。上肢マヒ、下肢マヒ、脳性マヒ、聾啞の障害など、氏を含めてわずか 6 人による出発だった。



会社はやがて福祉用具事業を開始し、福祉施設の運営、クリニックの開設等、時代の変化とともに新たな仕事を加えていった。健常者が働く他社との激しい競争——いくつもの困難に何回も遭遇したが、多くの人々の協力のお蔭でここまで継続してこることができた。

この間、時の労働大臣に手紙を出し、障害者の雇用対策の見直しを請願。それがきっかけとなり、1975 年には改正・障害者雇用促進法が国会で成立、現在の雇用率制度などが始まった。同社は労働省（当時）の第 1 号重度障害者雇用モデル企業の認定を受けた。また、鳩山首相時代に障害者制度の見直しが大きく動き出した。紆余曲折はあったが、2013 年、全会一致で障害者差別解消法が成立、本年 4 月に施行された。奇しくもアビリティーズ運動開始のちょうど 50 周年のその月に施行されたのだった——

総会後の懇親会には鳩山元首相も出席、参加者と親しく言葉を交わしながらアビリティーズ運動に対する支援の声を寄せていました。現在、会社は社員が 1000 人近くになり、重度を含む身体障害者が多数働いています。

実は私は伊東さんとは大学時代の同級生でした。卒業時に身障者が中心となった会社設立の話聞いたとき、その理念に共鳴し少しでも力になればとごく僅かながら印刷会社への出資を

申し出ました。今、私はほぼ毎年、株式の配当金を受け取っています。身障者の会社から配当なんてまったく期待しなかったことです。多くの身障者が働く会社が社員に給与を払い（社員は源泉税を納めている）、会社としても法人税ほかの諸税を納め、さらに株主への配当金を出しているわけです。しかも、それが半世紀続いてきたという事実に感動するのです。

伊東さんは別の著書でも綴っています。



「障害者も当たり前前の仕事につきたいのです。できることなら皆さんの援助に頼らず仕事をし、自分で給料を得て、生活したいのです。税金で養われるのではなく、納税者の立場に立ちたいのです」。

なんとという前向きな生き方でしょうか！

そしてまた今回も訴えています。

「アビリティーズ運動を開始した記念会のとき、この運動、会社は、必要なくなることを目標にする、と私は皆さんに申し上げました。障害者がたくさん集まって働く会社などがあるということこそ不自然なことであり、社会においては、障害を理由にせず、だれもが差別なく雇用され、働けるようになる社会であるべきであります」

障害者差別解消法が施行されましたが、差別の解消が実現するにはまだ時間がかかりそうです。あらためて伊東さんの高邁な理念と 50 年間の苦闘にねぎらいと賛嘆の声を送るとともに、健康に留意されて 100 周年への土台を作ってほしいと念願する次第です。

「アビリティーズ」とは、英語で「能力」のこと。人間が持っている可能性を意味しています。仮に障害者であっても、人間として生きる力、仕事をする力を持っていることから、その能力を生かす場とチャンスを与えてほしい、との願いから作られた協会です。この稿をお読みになった皆様が少しでも活動に理解と支援を寄せていただければ幸いです。

日本アビリティーズ協会のホームページは下記の通りです。

<https://www.abilities.jp/npo.php>

アビリティーズの綱領

わたしは平凡な人間でありたくない。非凡な人間としてできれば、保障よりも「チャンス」を選ぶこと……これこそわたしの願いである。

わたしは、国家に養われ、卑屈で、怠惰な人生をおくることに満足できない。わたしは、夢をえがき、計算された冒険の道を求め、建設しつづける。

たとえそれが成功しようとも、失敗しようとも。わたしは、すばらしい人生の刺激を、いくばくかの施し物のために放棄することなどしない。わたしは保障された生き方よりも、つねに挑戦する人生を選ぶ。それはユートピアのような日々ではなく、スリルに満ちた世界である。

わたしは、決して、恩恵のために自由を、慈善のために尊厳を捨てることはしない。いかなる権力者の前でも畏怖しないし、また、いかなる恐怖に対しても恐れることはない。姿勢を正し、誇らかに、なにことも恐れず、自らの意思で決断し、行動する。自分で創造していくことを大切に考え、世間に向かってこう宣言したい。

——これがわたしの成し遂げたことだ——と。すべての障害者のために、あなたとわたしのために、この綱領は名譽ある日本人としての道を示すものである。

一九六六年四月一七日宣言